

おぼけに出会ったとき

こわいものに出会ったとき、君はどうするだろう、たとえば、もしおぼけが出たら、君はどうするか。

あんまりこわかったら腰をぬかすだろう。昔から、おどろいて腰をぬかした話はよく聞く。腰をぬかすというのは、こわさというよりは、むしろおどろいたためなのだ。不意をうたれて、こころが混乱し、なにもこころがからだに命じることができないでいる状態なのだ。

驚きは、あるものが、あまりに不意に現われたので、危険かどうか区別がつかなくなって、なにをしたらよいかわからない当惑の感情である。

ところで、こわいものに不意に出会って、おどろきを感じ、そのおどろきがちずまってきたとき、君はどんなことを感じるだろうか。正直にいいたまえ。

君は、まずその場から逃げ出したい気持ちを感じる。それが逃走の衝動と呼ばれているものだ。うしろをふりむかずに、全速力で逃げたい。なにもかも、ほっぽりだして逃げたい。そう感じたからといって、じつさいに逃げることにはならないのだが、そういう衝動はだれでも感じる。

この逃げたいという衝動の強さは、こわさの度に比例しているといつてもいいだろう。逃げだしたい衝動を起こすものが、こわいという感情だといつてもよいくらいに、この感情と衝動は強く結びついているのである。

逃げるのは、とてもひきょうなことのように入れやすい。しかし、逃げるというのは、自然の中で生きている動物にとって、自分の安全を守るために、もつともたいせつな、もつとも有効な手段なのだ。とかく強くなり、たたかって勝って、自分の安全を守るのが、いちばん確実なように思われがちだが、じつさいには、それがいちばんむずかしい。強くなることで安心感を持ちたいという気持ちは、だれのこころにもある。それは願望というものだ。しかし、考えてみれば

すぐにもわかることだが、強くなつて安心するためには、この地上で最高に強くならねばならない。どんな動物でも、生まれたときは赤んぼうだし、赤んぼうのときから、最高に強い動物なんて、考えられな
いだろう。自分より強い動物がいるかぎり、いつも逃げずにたたかう本能しかなかつたら、何回かのうちには、自分が必ず殺される番にま
わるはずだ。これでは、自分の安全を守ることはならない。

その反対に、攻撃のための武器、牙だとか、角だとかがなくとも、ただ逃げるための速い足を持つているだけで、この地上での生存競争で、生きぬき、生き残つている動物が、どれだけいるかわからない。そのことは、この地上の動物を見わたしてみればすぐわかる。弱肉強食の原則のきびしい自然で、弱い、ただ逃げるだけしかとりのない動物が、たくさん生き残つていて、強い、りつばな牙や角を持った動物が、死にたえそうになっている。

自然の中では、動物のひとつにすぎない人間のこころの中で、逃げたいという衝動が強く残つていても、不思議ではない。しかも、人間は、道具も武器ももたない状態では、けつして他の動物とくらべて強くはないのだから。

逃げたいという衝動が感じられても、じつさいに人間が逃げだすことは少ない。こわいものを避けて、安全を見つけるためのほかの方法を知っているからだ。

しかし、人間がじつさいに走つて逃げださないからといって、逃げたい衝動がなくなつていと思つたらまちがいだ。逃げだすのは、勇気のない、おくびよう者のすることだという考えで、逃走の衝動はが
んじがらめにしぼられてはいるが、それでも、けつして消えてなくなつてはいない。

その証拠に、ぼくたちは夢のなかで、よく逃げている。人間は、いろんな夢をみるものだが、その中では、逃げている夢が、とても多い。君たちも、起きているときは、逃げるのはひきようだと思つて
いるだろうが、夢のなかではけつこう逃げているにちがいない。へびだとか犬だとかの動物や、こわいおじさんだとかに追いかけて、必

死になって逃げている夢を、見たことのないものは、君たちのなかにはいないだろうと思う。いろんな場所にかくれてみるが、すぐに見つかりそうになって走りだす。ときには、逃げたいけれど、足が動かなくて、どうしても逃げられない。ああ、つかまる、絶体絶命だ、と思ったところで目がさめることもある。目がさめた時は汗びっしょりだ。そうした夢を、ぼく自身も何度か見たものだ。ところが、その逆に、追いかけて、つかまえようとする夢はあまり見ない。しやくにさわった人間を追いかけて、もうじきつかまえられるというところで目のさめる夢なんて、あまり見ない。

ぼくたちは、逃げるのがひきようだという。また、そう思っている。それが、ぼくたちに、逃げるのをやめさせ、こわいものとたたかう衝動を起こさせる。もちろん、この衝動も、人間の自己防衛の本能につながっている。

しかし、その衝動が、むやみにとびだして来たらかえって危険だ。逃げようにも逃げられないとき、たたかわなければ、殺されるのを待つしかない。そのときに、たたかう強い衝動が起る。たたかえばかならず勝つとはかぎらないが、それでも、相手をちよつとひるませて、逃げる機会をみつけることができるかもしれない。確実にたすかるとはいえないが、確実に死んでしまうよりはいい。弱いものが、自分より強いとわかっているものとたたかうのは、じつは、逃げ道を捜すために、それが必要だからだ。それが、自然が弱い動物にも、たたかう衝動を与えた理由のひとつなのだ。自然の知恵のひとつともいえる。

ところで、人間は、社会生活をしているので、自然の敵と出会って逃げたり、たたかったりすることはない。そういう大昔からの衝動を、そのまま行動にあらわすことはなくなっている。そして、社会生活に必要なように、さいしよの衝動をおさえて、べつの目的に向かう衝動を起させている。

君が、学校から帰るとちゆうで、いじめっ子らしいこどもに出会うとする。相手は強そうだ。なんとなくこわい感じがする。そのとき、自分のこころの中に浮かんでくる衝動を、君は見つめるがいい。だれ

も、君といつしよにいなかったら、君はすこし遠まわりでも、まわり道をして帰るだろう。相手にならないのが、りこうだ。

しかし、君が、だれか君の知っているなかまといつしよだつたら、どうだろう。そのなかまに、ひきよう者だと思われるのがいやな場合だつたら、君は、知らぬ顔で、そのいじめつ子のいる道を、通つていこうとするだろうと思う。「おまえ、弱虫だから、あいつのいる道を通れないだろう。だらしねえな」なんて、そのなかまがいえば、なおさら、まわり道をしにくくなる。相手に勝てる自信がなくても、何とかして、相手に向かつていかなければならないような気持ちがわいてくる。

こんなことは、想像すればわかることだが、じつさいにも似たような経験をした者が多だろう。そのときの、君のこころの中に起つていることを、図式のようにして考えてみたらいい。まず、相手がこわいという感情がおこり、それが君に逃げたいという衝動を与える。しかし、逃げたらひきようだ、弱虫だといわれる、別のなかまから軽蔑されることのこわさが、同時に君のこころに生まれる。その二つめのこわさが、君に逃げる衝動をおさえて、べつの反対の行動へまっすぐ進ませる。こわいものに挑戦させる衝動を、起させるのだ。

君が、いじめつ子の前で感じた二つのこわさの、ひとつは自然のこわさで、もうひとつは社会からの罰をうけ、のけものにされるといふこわさだつた。そして、そこで二つのこわさがたたかいあうことになった。そのどちらが勝つかによつて、それとつながりを持った衝動が、行動となつてすがたを現わすことになるのだ。それを、自然のままの人間の本能と、社会を作つている人間の本能のあらそいと見ることもできるだろう。

逃げださずにたたかうこの気持ちは、ぼくたちの社会では、勇気という名前で呼ばれている。そして、逃げたい気持ちを、ひきようだとか、おくびようとか呼ぶ。ぼくたちの社会は、前のほうの衝動をりっぱなものと考え、あとのほうの衝動を価値の低いものだとしている。しかし、こうして、こころの底をのぞいてみると、ただいいとか悪いとかで、かたづけられるべきものではないことがわかるだろう。勇気

だとか、おくびようだとかは、人間しか問題にならない価値、社会的な価値である。

少しへソまがりな逆の見かたをすると、自然の人間の本能からでた衝動は強い。そのままだったら、人間はこわいものに出会ったら、みんな勝手に逃げだしてしまい、社会はくずれてしまう。社会というグループ全体として、自分たちをまもることなど、できはしないだろう。だから、その強い自然の衝動に勝つために、逃げずにたたかう衝動を、勇気と呼んではげまし、逃げだす衝動をおくびようと呼んで、押さえつける必要がある。

君が、離れ小島にひとりで流れついて生活しているときは、こわいものからは逃げ、自分を守ることは当然だと感じるだろう。逆に、自分の行動が、他の人間に注意深く見まもられていることを感じれば、かつこよく、勇気があるようにふるまわなければならないと感じる。そのちがいがでてくるのは当然なのだ。

こうして、勇気というものは、どういう理由で、どんな場合に、なにを目的にしたものかを考えないと、しばしば、ぼくたちをむだに危険にさらすだけのことにおわる。ぼくたちを意味のない危険にさらし、むりをさせ、ばかげたことをしでかさせる。ときには、おくびようものと呼ばれてもいいから、かしく逃げだして危険をさけるほうが、ずっと強いこころの力を必要とすることだつてある。そのことを、君たちは、よく考えてみる必要がある。

勇気が社会的な価値を持ったものだということは、昔、社会に、さむらいや、百姓や、町人などの階級があつた時代、さむらいがもつとも勇気があることを要求されていたことをみればわかる。さむらいは、おくびよう者と呼ばれることを、死ぬよりもおそれていた。おなじような場合に、町人なら逃げだしても当然なのに、さむらいは逃げられずに、自分から死なねばならなかつた。こうして、つまらぬ原因から、さむらいのメンツをたもつために、殺し合いをして死んでいったものが、どれほどいたか。

こうやって考えてみればわかることだが、全部が全部そうだとはい

わないけれども、勇気と呼ぶものも、じつは、こわさの一種だということができるだろう。社会の罰をうけるこわさが、勇気ある行動と呼ばれるものに、人間たちをかりたてるというわけだ。つまり、こわさにも、二種類ある。自然のままの人間のこわさと、社会の人間として持つこわさだ。社会と個人が、いつもおなじ敵をもっていれば問題はないのだけれど、ときには、社会が個人にとって敵になることもある。そこから、ひとりの人間のなかで、二つの衝動の対立が生まれてくる。

ぼくは、昔、軍人になるための学校にちよつとばかりいたことがある。それで知ったのだが、どこの国の軍隊も、逃げることを兵隊に教えない。おかしいことだ。逃げるのは、本能的にやれということなのだろうか。社会的にも、逃げることに意味のある場合は、たくさんあると思うのだが。むだに命をすてないために生きるということは、社会のためにもたいせつだと、君は思わないだろうか。

ぼくは君たちに、逃げることの意味を、このあたりで、すこし考えてもらいたいと思う。(四六二六字、一部省略した部分がある)

なだいなだ『心の底をのぞいたら』(ちくま文庫、一九九二〔一九七二〕年)による